

【聖書テキスト】

ルカ福音書 23:44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。49 イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

今や主イエスの死の道の報告は終りを告げます。み業は成就しました。そして、ここで起きていることは、私たちみな必ず迎える、厳しい「死」という局面において極めて重大であり、決定的なものとなりました。私たちが経験する別離においては、どんなに小さな希望であっても、全く希望が持てないような別離というものは、この地上には存在しません。それは最後の別離、永遠の別離ではないでしょう。しかし、ただ死だけは違います。私たち誰もが必ず迎える瀕死の状態、その瀕死の状態になる時、私たちは自分たちの死の本当の厳しさに直面する事でしょう。死とは、全くまったくとり返しのかねこと。私たちが私たちの地上の目で見ること、「死」において再会の希望がまったくないことは確かです。

死が割りこんで来る時には、何ものをもってしても償うことはできません。死はまったく私たちの行為に従い、私たちに責めを負わせるのです。自分たちの主(あるじ)、つまり神にたいする人間の拒否は、字義通りに言えば、「息を引き取る」その瞬間に決定的になります。すべての受難の讃美歌が私たちに語っている事です、神を拒否したのは、ただ単に聖書に描かれた当時のあの民衆の拒否だけではなくだったということ、すなわち、「私こそその償いをすべきものなのです」ということを、私たちはよく知っています。また次のことは何も偶然ではありません。すなわち、キリストが地上へ再び来られることを、別の時代、たとえば私たちの現代において表現しようとするあらゆる詩人の試みは、にも拘らず結局どれも、それが改めてイエスを拒み、イエスをうち殺すという結果になっているように思われます。この受難物語の鏡にたてて私たちすべてを見ないものは誰も、人間について何か本当のことを知りません。キリストの受難においてこそ、私たちについて言われねばならない究極のことが明らかとなります。

さてしかし、キリストの受難は、本当にこの目的にそうように、そのものずばりに私たちに語られてはいません。いわばその経過をたどることによってのみ、私たちの真の本質もあらわにされ、その結果私たちは驚かされるのです。真に罪を赦した方が、罪人だと語られる、という経過においてのみ、さらにただその赦しを明らかにするという経過においてのみ、人間の罪もまた述べられるのです。私たちが受難物語を読む時、この死を救いとして理解することができます。それがどんな救いであるかは、言うまでもなく、地上の苦悩を、その全き大きさにおいて見る者のみが、理解する救いです。

注意深く生きているものにとって、一九四〇年はしばしばもう耐えられないと思うほどの、多くの苦悩を見せたり、また聞かせたりしたのですが、この年の受難週と受難節は、地上のあらゆる

る苦悩にたいする十字架上のキリストの救いを私たちが認識しないでは、終えることはできません。ドイツ中世の修道女マグデブルクのメヒルド(1210-1285)は、私たちに正しい道を示すような一節を書いたようです。

「今ははやわれは地上の時を思うのをぞまず。

わが心、悲しみと心の痛みより放たれたり。

歌いつつ汝をほめ始むる前、かつてわれは思いぬ、

上にてわれ、汝にまみゆる時、わがなげきを汝に訴えんと。

今は主よ、汝のみ姿われを打ちぬ。

汝、われとわが人間性の彼方にてわれを支え給えばなり」。

キリストの苦悩は、私たちの目を私たち自身の苦悩からひきはなして、この世における神の苦悩に向けさせます。キリストの苦悩は、この世にたいする最も深い神の関与です。あなたがたは、キリストの苦悩を次のように理解しなければなりません。すなわち、キリストの苦悩があなたがたの自分の苦悩のさなかで、また他人の苦悩にあなたがたがあずかっているそのなかであなたがたを救うためなのだ、と。キリストの苦悩は、私たちの生活の上に、不気味な真実をなげかけています。私たちのすべての苦悩の終局で罪が明らかになるのです。キリストが中風の者に、何の同情めいた言葉も語られず、まず、彼の罪を想起させる、「子よ、あなたの罪はゆるされた」というみ言葉を語られますが、これはいわれの無いことではありません。神が私たちすべてにおいて、その不信仰において、その心のかたくなさにおいて、苦悩しておられるのだということを、地上のあらゆる苦悩は指し示しています。キリストの十字架は、神はそれを、私たちになされるよりたやすく、ご自身になされたものではありません。すべてのなかで最も困難なことを、まったくただ一人で担われたのだ、ということを物語っています。キリストの十字架の道は、見捨てられた状態への歩みでありました。しかし、イエスがその歩みをなさらなかったとしても、神に見捨てられるという事は私たちの前に実際に存在しています。キリストの十字架は天と地の分裂のしるしです。この分裂を私たちすべては理解できませんが、この十字架を神ご自身がうち立てられなかったとしても、この分裂は私たちの前に存在するようなものです。このことを理解しようとする者は誰でも、私たち自身の悩みをますます忘れることでしょう。先ず、神の愛こそが、私たちにおいて、私たちのあり方や生き方において苦悩されねばならないからだとわかります。以上が第一のことです。

そして第二はこうです。受難物語は、対立した事柄がそのなかで結びあわされているという点に、特別の秘義があります。マタイ福音書の記者が伝えているように(マタイ 27:46)、「見捨てられる」という最後のみ言葉、神の子が神から見捨てられている、という謎にみちたみ言葉のすぐ側に、「イエスが苦悩にみちた絶叫された」(新共同訳「**イエスは大声で叫ばれた。**」)と私たちがルカ福音書で聞かされているようなみ言葉があります。恐らくそれは側に立っていたものだけに聞えたのでしょう。しかし、この言葉は、主イエスにこの苦悩を与えられた方、その方との最も内的な一致を示すみ言葉です。

主イエスは、十字架の道を進んでゆかれたのですが、これはこの悪しき世、ユダヤ人とその憎悪によってご自分に加えられている苦悩だ…とは一瞬といえども考えられませんでした。常に次のことをご存じであったのです。すなわち、もしも神がそれを与えられないなら、また父がそれを私の上に置かれないなら、彼らは何もなしえないという事、この苦悩は父が私に与えられた杯なのだと。そこで主は、ご自分にそれを与えられた方に向かって、「父よ」と言われるの

です。うち砕かれ・殺される者が、自分をうち砕き、死に至らしめる者の意志を完全に理解し、心からそれに同意するという、そういうことを言い表わす言葉はほかにはありません。

キリストの言われた「父よ!」は、人間が直面するあらゆる問題のための呼びかけです。私たちが直面する問題は、ありとあらゆる耐え難い苦悩を、容易にかきみだされる私たちの心のうちに呼びさします。この「父よ」という主の呼びかけは、あなたの生活と、あなたが今神のみ前に伴って来た人々の生活の中にある

一九四〇年のあらゆる問題のための呼びかけです。「父よ」とイエスは言われます。この主の「父よ」という呼びかけは、主イエスが私たちの誰かを助けられない時には、誰もその苦悩を本当に担うことはできないのだ…と私たちに教えてくれます。その人は、イエスと共にいてはじめて、打ち砕かれるまで、歩んでいく事ができます。

このイエス・キリストの「父よ」がなければ、誰もその苦悩を本当に克服することはできません。おそらく、人はこの苦悩からいち早く逃れ、逃亡することができますし、それを時の来る前にまぬがれることができるでしょう。しかしそれを克服することはできません。言いかえれば、まずこの苦悩のなかでも満たされる神の祝福のうちに生きる…というふうには、この苦しみを免れることはできません。あなたは、まず苦悩のなかでこそ、あなたを待つ神の祝福にあずからないならば、苦悩から逃れたところで、それがあなたにとって何の助けになるでしょう。あなたが逃亡に成功した時、あなたはいつそうみじめになるのです。

さて、この「父よ」という言葉を語ることは、主イエスにとって決して何かよりた易いことのように考えられません。あなたがたは自分にこう言いかけなさい。すなわち、「父よ」というみ言葉への入口が私たちに開かれていること、言いかえれば、私たちに負わせられたいっさいを、彼の、父の手から贈られたものとして受け取り、私たちのために苦悩のうちに保たれている祝福にのみ目をとめるようにうけとること、これ以外の逃れ道、また真の救いは地上の苦悩には存在しないのだ、と。

このみ言葉は、この世がこれと比べるべき何ものもない苦悩のうちに語られています。十字架刑そのものは、すでに悪魔の暗示、ほかに類を見ないような苛責の処刑です。十字架にかけられたものは、暑さにさいなまれてかけられ、その傷は炎症をおこし、その体全体は、鞭で打たれてからというものは、傷だらけなのです。体の硬直がおこるのが常で、彼は苦痛によってもはや動くことができなくなります。その上、十字架にかけられたものは死の不安に悩み、その不安はあらゆる苦痛よりも恐るべきものでありました。また彼は死がいつおとずれるかを知らないのです。その時彼は、ただ逃れるすべもなく死を迎えるのだと知り、こうして時間は際限もなく続くのです。

この時肉体的に苦しむことによって、十字架にかけられた主イエスは、かつてこの十字架刑をうけた、あらゆるものの苛責に関わっておられるということ、というだけではありません。何かほかの時ではなく、この時に、彼は「父よ」と言われます。何かほかの時でなくこの最大の苦悩にある時、彼は「父よ」というみ言葉を私たちのため、あらかじめ語られました。ただそういうふうには呼ぶかけるだけではなく、私たちが直面する悩みすべてを知り、またそれにあずかっており、ただ一つの逃れ道、「父よ」というみ言葉をお示しになる方としてお語りになるのです。

それは、私たちがたった今聞いた詩篇31篇の言葉をつけ加えている、ということでわかります(詩編31:6「まことの神、主よ、御手にわたしの霊を委ねます」ルカ23:46「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」)。これをつけ加えることによって、十字架につけられた方は、「父よ」

というみ言葉を私たちに説明されるのです。イエスが詩篇の言葉をとりあげておられるのは、第一に、それを聞いたすべての者のためにいま一度告白される、ということを意味します。もしも、あなた方が最も美しい詩篇の一つ、詩篇31篇を読み直すならば、それが、義人が神を呼ぶ詩篇の一つであること、また神は敵のわなから彼を守られるであろう、と深く信頼しているのが分るでしょう。主イエスは外面的にはまったく破滅しました、また神から見捨てられた人間の姿を示しながら、この詩篇によって祈っておられるのですが、彼はそれを聞いているすべてのものにこう語っておられます。彼は迷わず、また何の疑いもなく、ご自分の使命を確信しておられること、また神が彼に与えられたあらゆる苦しみにもかかわらず、迷うことなく神をご自分の守り手と認めている、と語っておられるのです。

この時、主イエスは十字架にしっかり釘づけられてかかっておられ、地上には十字架の横木のほかにいるべき所を持たなかったのです。主イエスは、地上には十字架の横木のほかにいるべき所を持たなかった、そしてこの詩篇の言葉を祈っておられます。そこには、「**あなたは、わたしの足をひろい所にたたせられたからです**」(詩 31:8)あります。彼のメシヤ意識の告白、彼が神から遣わされたものであること、彼の人生に神の賜物があらわにされているという告白が、この詩篇の一節の祈りなのです。

この意味は、第一に主イエスはご自分の言葉をお選びになりません。私たちが、その祈りにおいて、それはただイエスにしかあてはまらないのではないかという疑惑を持つかも知れないような祈りを、イエスは語っておられません。イエスは、どのユダヤ人もその当時知っていた祈りをとりあげます。それは、この一節を聞けば、誰にも思いうかんでくる、無数の人が、彼の前にもすでに、無数の危急にさいして祈って来たものなのです。イエスは私たちの祈りに関わりを持たれます。もしもあなたが今、あなたの苦悩において、また他人の悩みのために手をあげて祈るならば、イエス・キリストはあなたの祈りに関わっておられるのだと知りなさい。あなたは、ただ一人見捨てられた人ではなく、イエスがあなたとともに同じ言葉を語っておられ、私たちの苦悩の中にすっからはいつてゆかれるのです。

そこで今やまた第二のことがすでに生じています。イエスはご自分の苦悩のなかで祈ることによって、

文字通り、私たちの祈りを神の前に携えてゆかれるのです。今や主イエスの名により、またイエスとの関わりをよび求めることによって語られる祈りは、力つきて再び地に落ちてしまうということはありません。主イエスなしには、私たちの祈りは雲を通りぬけることもできないで、どこかで発散してしまう、無気力な吐息でありましょう。彼が祈っておられるので、彼とともにおれば、今はどんな祈りも聞かれないままにいることはない私たちは確信し、また、「**父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます**」という祈りの言葉は、神のみもとにのぼってゆくのだと確信することができるのです。

そして、主イエスがそのことを、私たちの言葉で祈っておられるのを聞くものは、今次のようにすすめられています。あらゆることを同じように主イエスにゆだねるように、あなたの病める肉体を彼にゆだねるように、あなたが非常に傷ついていると思っているあなたの魂のこと、あなたの子供たちのこと、あなたの無意味にすごした年月のこと、あなたの失敗した職業のこと、あなたの失敗した結婚のこと、あなたがあしき父であり、母であること、あなたの重荷、またあなたの困窮をイエスに委ねるようにすすめられているのです。父よ、私はイエス・キリストの名においてすべてをみ手にゆだねます。「**今やあふれる喜びもて、汝をつねにほめたたえざらんや、いと**

深き悩みにありても、われ勝ちて雄々しく歩まざらんや」。この賛美の言葉は人間に不可能だ…と思い込まないように。イエス・キリストが人となられたことによって、それはまったく人間に可能となったのであり、また私たちすべてはそうすることができるのです。

それを示すために、受難物語は、特に麗しい言葉によって終ってまいります。つまり、その時すでに十字架の下に新しい教会が存在しています。主は地上の生活から取り去られました。彼は殺されてしまったのです。「彼の民は彼を受けいれなかった」〔ヨハネ1:11〕のです。ピラトは、今やこの事件はすんでしまったと考えています。祭司長たちは、今やこのやっかいな人物はいなくなり、決定的に取り除かれた、と考えています。彼らは少数の弟子たちのことを気にかける必要がないと思っています。彼らは弟子たちを逮捕しません。なぜなら、指導者が死んでしまえば、残りのものはみな散らされ、やがて忘れられてしまうだろう、と考えたのです。

しかし、その時十字架の下には新しい教会がすでに存在しております。教会はまだ自分自身を知りはしません。教会は全力で始めねばならぬことをまだ少しも知りません。痛みと失望と悲しみとは、彼らの心をひきさいています。けれども、彼らはそこにおります。彼らは十字架の回りに集まっていたのです。彼らは初め恐れて散らされ、そして「イエスに従ってきた」人たちでした。残りのユダヤの民衆が主イエスにくみしています。少なくとも民衆の一部分が主イエスにくみしています。その人々については、福音書記者達は

「イエスの十字架の最後を見て胸を打ちながら帰って行った」と語ります。それゆえ民衆の間に十字架の下で、彼らの心の内に一つの動きが始まっており、後には、使徒達の言葉が彼らの心を貫いて、彼らを「神の身許に立ち帰る」ように導くことになります。

そして最後に私たちすべての代表者、異邦人の代表者として、百人隊長がイエスに味方します。伝説によれば、彼の名はロンギヌス。彼は、この殺された人は「正しい人」であった、言いかえれば、「罪人ではなく、また罪人の側に属するものでなく、神の側に属する者であった」と言っています。この百人隊長は、十字架に向かって巡礼した異邦人世界の無数の人と民の流れの先頭に立つものです。その真中に私たちドイツ国民もおります。私たちの民族はこの新たな教会に加わり、その結果、私たちの民族にも新たな可能性、すなわち、最も深い苦悩のなかで「父よ」と言い、こうして、あらゆる苦悩を担いまた克服する可能性が開かれたのです。私たちの民族がこの十字架の下に立とうとしないなら、またこのイエスを告白しようとするなら、その苦悩を真に担いかつ克服することはもはや不可能となります。それゆえ私たちは、この方、十字架につけられた主に祈るのです。

「主キリスト・イエスよ、われらの傍に留まりたまえ。

夕は訪れ、日は傾きたれば、われらはこの民を汝にゆだねまつる。

この人類、われらの生、また悩みを汝のみ手に」。

アーメン。